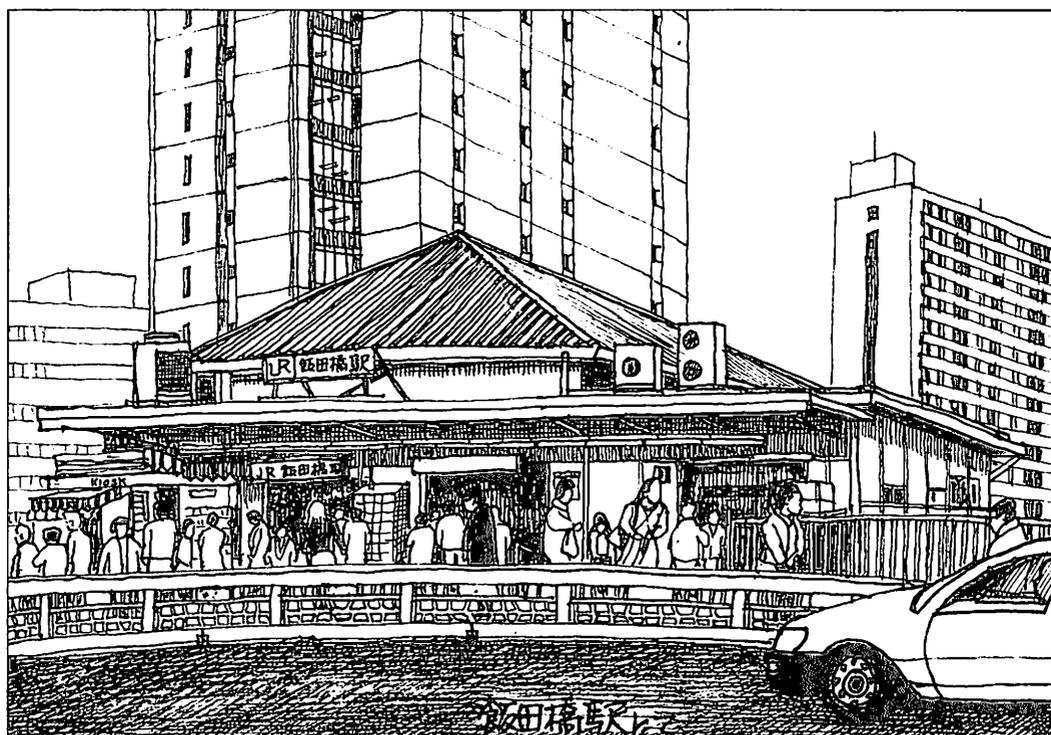


# 東京

月刊

2004. 2  
通巻244号

- **特集** 東京の教育が直面する危機 木戸口正宏・渡辺隆司・武者日出男・中川重徳
- **論文** データでみる食生活の変化と環境への影響 根本志保子  
「補完性の原理」批判・「NPM行革」への対抗のために(その4) 安達智則





本誌の読者なり、「世界社会フォーラム (World Social Forum)」という名前を聞いたことがあるだろう。二〇〇一年一月にブラジル・ポルトアレグレで産声をあげ、毎年一月に世界の現状批判勢力、非戦平和勢力が集う新しいインターナショナルである。もともと二〇世紀までの第一、第二、第三、第四インターといった系列とは出自も性格も異なり、「生命系民主主義」をめざした「多様な運動体によるひとつの運動」「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」だから、「グローバル・ネットワーク」とよんだ方がいいたろう。

もともと世界の政財官指導者が毎年一月にスイスのダボスで開催する新自由主義グローバル化推進の「世界経済フォーラム (World Economic Forum、ダボス会議)」に対抗して、「反グローバル化」を掲げるNGO・NPO・社会運動が集ったものであったが、最初の年の九・一一同時テロ以降、世界の非戦平和運動の中心になり、昨年二月十五日には、実に千五百万人をイラク反戦のグローバルな街頭行動に駆り立てた。今年は初めてブラジルを離れ、一月二六日から二二日まで、インドのムンバイで開かれた。世界一三三か国から一二万五千人、日本からも三五〇人が参加した。ちょうど試験期で私自身は行けなかったが、日本で関心を喚起しムンバイに持って行ってもらう

うと、世界社会フォーラムの全体像を紹介した初めての本、「フィッシュャーリーポニーア」も「ひとつの世界は可能だ」(日本経済評論社)を、若く活動的な大学院生に協力してもらって翻訳し、昨年クリスマスに刊行した。もしも世界が百人の村だったら「の池田香代子さんは、早速NHK」週刊ブックレビュー」でとりあげてくれた。折から自衛隊のイラク派兵も始まったが、参加者たちからは連日感動の参加記が電子メールで送られてきて、インターネット上では、十分臨場感を持って世界の民衆と連帯することができた。当初の「反グローバル化」が、新自由主義と政策的に対決し代替案を示す「もうひとつの世界は可能だ」に転化してきたことも、ライブのウェブ報道から実感することができた。

ところがこれに、日本のマスコミは全く無関心だった。写真やポスターだけでも十分にメッセージがわくし、会場では一三の言語で画期的なIT通訳システムも機能したというのに、共同通信配信の「反グローバル化の波拡大、印のフォーラムに一二万人」という短く不正確なニュースのみ。わずかに「しんかん赤旗」が記者を送ったが、マスコミが追ったのは国会議員の学歴詐称スキャンダルばかり。イラク派兵が本格化し、改憲が焦点に浮上した今、マスコミを監視すると共に、私たち自身の情報ネットワーク構築が急務である。

加藤 哲郎 (一橋大学・研究所理事)

表紙絵「JR飯田橋駅南口にて」

学徒援護会学生寮(現武道館)の田安門から早稲田通りを一直線に下ると飯田橋駅南口に出ます。学生時代ここから渋谷・自由が丘をへて尾山台へ通学したことを思い出します。もちろん、後ろにせまるセントラルプラザの超高層や公団のマンションもありません。

駅前もすっかり整備され、昔日の面影が薄くなりました。しかし、飯田橋駅舎は四三年前とあまり変わりありません。忙しく出入りする人々の多さも変わらないうです。

(二〇〇四年一月二八日 画)

絵/文 小川満世

### 主な活動予定

- ・ 第四回常任理事会  
三月一五日(月) 午後六時三〇分  
ラパスビル地下会議室
- ・ 東京NPM研究会  
三月一二日(金) 午後六時三〇分  
東京自治問題研究所

「もうひとつの世界は可能だ」  
実感した世界の民衆との連帯